

序

アサリは、日本全国の淡水の影響がある内湾の砂泥干潟に生息する二枚貝である。日本人にとって馴染が深く、また、食材としての利用価値が高く、沿岸漁業にとって重要な水産生物である。

日本におけるアサリの漁獲量は二枚貝の中で最も多く、1970年代半ばまでは全国で年間12～16万トンの間で安定していた。しかし、1985年以降、九州および瀬戸内海における漁獲の低下が著しく、1997年の漁獲量は全国では4万トン程度に減少した。瀬戸内海における2001年の漁獲量、2,820トンは、1985年の最大漁獲量、45,023トンの6%にまで低下した。

アサリは、卵からふ化した浮遊幼生の生活期の後に底質に着定・埋没し、入水管から低層水中の植物プランクトンを餌料として摂取する。アサリの生活史や生態的特徴から資源減少の要因として、親貝の減少に伴ったふ化幼生の減少、稚貝が定着する底質環境の悪化、植物プランクトンの減少等餌料環境の悪化、アサリを捕食する生物の生息等が考えられるが、資源減少の原因は解明されていない。そこで、この漁獲量減少の原因を究明し、アサリ資源回復の対策を講じることが急務となっている。

このような背景において、既往の知見の整理及び解析を通してアサリ資源減少の原因を考察するとともに、今後取り組む必要のある研究課題を抽出することを目的として、独立行政法人水産総合研究センターは、シンポジウム「アサリの生産を支える生物生産環境の問題点と新たな研究視点」を開催した。シンポジウムでは、アサリ資源減少の要因として特に重要と考えられるアサリをとりまく環境の問題点およびアサリの初期生態の特性の両面から資源減少の問題を検討した。

本書は、シンポジウムにおける講演および討論を取りまとめたものである。本書が、今後のアサリ資源減少原因究明のための研究推進方向の検討、研究の深化および資源回復のための対策技術開発の検討において適切な素材として役立てば幸いである。

平成17年3月

瀬戸内海区水産研究所長

山田 久